



石灯笼 西里定一 画

慶蔵院寺報

公孫樹

2021年1月発行

第108号

浄土宗慶蔵院

伊勢市小俣町元町 1211

TEL 0596 (22) 3726

明けましておめでとございます

新しい年が始まります。

一日は前日の別時念仏・仏名会、除夜の鐘から引き続いての修正会の余韻の中、堤防下の畑の草を引きながらゆっくりとさせていただきます。朝の勤行の後に山崎弁栄上人の伝記を少しづつ紐解いています。弁栄上人のお父さんは、念仏嘉平と呼ばれたほど、百姓をしながら朝夕に三千遍お念仏を称え、毎月十五日には六万遍称えていたといわれています。三千遍で一時間かかります。三万遍で十時間です。六万遍を称えるのに嘉平さんは、朝の一時から夕方までかかって称えたといわれています。弁栄聖人の誕生には、嘉平さんのお念仏があったのです。


二日、三日はラジオの前で箱根駅伝を楽しみたいと思います。テレビではなくラジオです。地デジ対応の際にテレビを捨てました。テレビがないからラジオなのですが、年を追うごとに箱根駅伝が楽しみになってきました。勝敗の行方、結果にも興味はありますが、それにもまして各学校の作戦の成功、不成功。作戦や予想を超える、自然・天候・偶然・奇跡の要因が、選手一人ひとりの身体能力・精神力の要因とからまってドラマを作り出します。筋書きのない一回限りのドラマ。それに今年はコロナの関係で沿道に詰めかける観客がない。ラジオは何の音も拾ってくれるのだろうか。見えていないものを聞くことを通して観る。映像がないから、逆に映像がみえてくる。仏様、神様が見えないけれども現れてくるというように…。箱根には、駅伝の神様が降りてくるのかも知れない…。

玄関をでると真正面に西里さんに描いていただいた、石灯笼が見えます。昔からそこに置かれていたかのように収まっています。十月十六日に岡崎から鞍馬石を運んでくださった菅沼石材さんからの寄進です。その場所は鞍馬石を設置するかどうかを検討した場所でもあり、届いた日に、バラバラに仮置きされていた場所でもあります。西に置かれた鞍馬石と、本堂に向かって対になるかのように東門横に設置されました。灯笼の見えない光が、新しい年の行く手を照らしてくれているようです。飛躍の年にしたいものです。



1月の行事予定



| | | |
|-----------|---------------------------------------|--|
| 6日(水) | 写経 映画会 | 午前10時～ 午後7時半～ |
| 13日(水) | 念仏会 | 午後7時半～ |
| 20日(水) | 健康教室 歩き方教室 講師 馬場久美子先生 男性詠唱隊 | 午後1時～ 参加費 500円  午後7時半～ |
| 27日(水) | 読経会 | 午後7時半～ |
| 25日(月) | 戦没者慰霊 | 午前11時～ |
| 8日・22日(金) | 茶道教室 講師 河井宗恵先生 樋口宗恵先生 田島宗紀先生 | 午後7時～子ども茶道教室 午後7時半～大人茶道教室 子ども 無料 大人 500円 |
| 14日(木) | ともいき英語サロン 講師 三浦邦昭先生 | 午前10時～11時半 午後1時半～3時 参加費1000円 |
| 予約があれば水曜日 | キサン シンキングボウル ヒーリング | 午後1時～ 要望に応じて30分～60分 |

慶蔵院豆知識

⑤

境内のフクロウ

フクロウの鳴き声は、「ホー、ホー、のりつけほーせい」と聞こえます。フクロウが鳴くと明日天気になる…。境内にあった樅の樹の洞に巣をつくったこともありました。伊勢湾台風後にその樅も枯れ、フクロウの声は聴けなくなりました。

ところが三十年ほど前になります。孫の信也と中庭の藪の中に、動かない大きなフクロウを見つけたのです。

近づいて、じっと見ても動きません。あまり動かないので、弱っているのではないかと心配になり、傍まで行って頭を撫でてみようと思ったのです。信也が小さな手を伸ばし頭に触れた時です。フクロウは、カーと目を見開き、大きな鋭い目で睨み返しました。形相が一変したのです。猛禽類の目でした。信也が危ない…。

その恐ろしさに、眼をつつかれるのではないかと我が眼を押さえ縮み上がりました。

ところが大物のフクロウは、攻撃するどころか、何事もなかったかのように、悠々と羽ばたいて、飛んで行ってしまいました。しばらくは、その怖かった思いが消えませんでした。「コロナで帰ってこれない信也に、この時の出来事を聞いてみると」覚えとるよ。なんにもせーへんだのに、怖いことなんかなかった」と私の失敗談です。

(栄子)



S君のドラマが本になりました!!

あきらめたら、何も起こらない

創設活動の先にあった夢の舞台 ⑦



うれしい。まさか自分が、県内のスター選手や甲子園メンバーに交じって、いっしょに野球をプレーするなんて。

なによりも夢に見た「高校野球」の「試合」を、あこがれの野球場でできる。

当日、集合時刻より3時間も早く着いてしまった。同い年とはいえ初対面の選手も多く、どういう感じで話せばいいか不安もある。でも、ぼくの顔を見るなり「今日はよろしく!」と次々に声をかけてくれた。

「オレのこと知ってるの?」と聞くと、

「知らんわけないやろ!」「ウチの高校の野球部、全員お前のこと知ってるよ」と返ってきた。彼らのマインドが、本当にありがたかった。

甲子園やプロ入りが近くにある彼らにとって、ぼくの存在など無関心だと思っていたから。

試合ではヒットも打った。二塁打だ。相手のキャッチャーが、ぼくが打席に入るたび「コイツすごいバッターだから、外野下がれ!」と言って、やたらヒットゾーンを広げてくれた珍アシストもあったけど、あれは普通の守備隊形でもヒットになっていたと思う。

スタンドで見ていたぼくの家族や友だちが、手をたたいて喜んでくれているのが、二塁ベース上からはっきり見えた。

相手の二塁手が「初ヒットおめでとう!」とかけ寄ってくる。

高校生活の最後に、一生忘れることのない最高の景色を見た。



野球部は作れなかったけれど、高校3年間、ぼくはつねに「野球部員」であり続けた。間違はなく、ぼくの人生の礎だ。

(おわり)

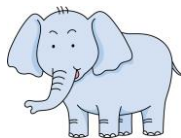
次回子ども会予告

2月21日(日) 10時~

第一部 お話・絵本・紙芝居



- ① かくれんぼ
- ② 象の鼻はなぜ長い
- ③ てんぐのかくれみの



松過ぎて念仏三昧朝参り

奥田 悦生

(「知恩」誌一月号「柳壇」に掲載)



打ッ人も打たる人も
 ナムアミハカ
 ホウホウ / 切皆空
 過去は総て切皆空
 新 / 破算
 前途に向ッテ
 研究と発展の第一歩を
 飛躍すること
 発展と、萬福をお祈り
 申し上げます
 中野善英上人のことば

終着駅は始発駅。到達点は出発地点。

そこにたどり着くまでには、いろいろなことがあった。困難も、失敗も、成功も。後悔も歓喜も。すべてが混ざり合って、今がある。

何もかもを受け入れてみれば、トータルして、悪いことは何も無い。すべてが今に至るまでの過程としての線上にある。

全てを受け入れた時が終着駅であり到達点。

それは終わりではなく始まりの時。

その「始まり」を、今、一度、始めなければならぬ。飛躍の第一歩を。新しい年が始まる。

二十六日の朝刊は、作詞家、なかにし礼さんの死を報じていた。

「日本という国家に三回見捨てられた」は、なかにし礼さんの言葉。壮絶な満州からの引き上げ体験の持ち主。一九六九年、弘田三枝子が歌った「人形の家」についてなかにし礼さんが語るラジコを聞いたことがある。

「顔も見たくないほどあなたに嫌われるなんて、とても信じられない。愛が消えた今も。」とは、国家の政策を信じ、愛国心を持って軍隊に守られ、満州に入った多くの日本人家族が、「私はあなたに命を預けた」はずなのに、先に逃げだした軍隊に見捨てられ、「埃にまみれて」逃げまどい、命からがら生きて、日本に帰りつくことができたことを、世情に置き換えて書いた詩である…と、歌が生まれる背景に、このような史実があったとは思って。今度カラオケで歌う機会があれば、この背景に思いをさせて「人形の家」を歌ってみたいと思っている。「出発の歌」として。「いのち」を預けるのは仏様である。